

## 追悼文

## 地球をめぐる風と共に

—国際的気候学者 吉野正敏先生を偲ぶ—

本学会名誉会員、元常任理事の吉野正敏先生（筑波大学名誉教授、地球惑星科学連合フェロー）は、本年7月4日89歳の生涯を閉じられました。吉野先生は、1951年（昭和26年）東京文科大学（東京教育大学の前身）地学科（地理学専攻）を卒業され、同大学大学院を経て、1953年東京教育大学（現在の筑波大学の前身）理学部助手に就職され、1967年法政大学文学部助教授、1969年同教授を経て、1974年から筑波大学地球科学系教授に赴任され、1991年に定年退官されるまで、気候学・気象学分野での研究と教育に従事され、多くの学生・研究者を育ててこられました。筑波大学退職後も、1998年まで愛知大学文学部教授として活発な研究・教育活動を続けておられました。学会活動での指導的役割も多く果たされ、日本地理学会会長、日本沙漠学会会長、気候影響・利用研究会会長、バイオクリマ研究会会長なども歴任されています。

実は吉野先生は、まだ若かりし東京教育大助手の時代、7年間（1954年7月～1961年7月）にわたり、本学会のこの『天気』の編集委員を務められ、『天気』の質の向上に大きく貢献されています。ご自身の回想録には、以下のように書かれています。「当時、編集委員は受け持つ号を相談して決め、編集委員会で同意をえた後、論文を集め、割り付けをし、表紙の色や写真を集め、1号全体のレイアウトをしなければならなかった。もちろん、最終校正の責任も持たねばならなかった。目指す雑誌の形態は気象をテーマにした“科学雑誌”に近かった。（中略）この経験は後に幾つかの国内・国外で刊行されている雑誌の編集委員になったとき非常に役立った。（中略）私は20才後半から30才前半でまだ駆け出し、（この委員会での）先輩格で将来一流の研究者・著者・編者になる人たちの発言は得がたいものであった。その後の私の研究、現象把握・解明方法、発表や表現方法にどれほど参考になったことか。」昨今、学会誌の編集など「雑用」と位置付けて避けたがる若手研究者が多いようですが、吉野



2000年ソウルでの国際地理学連合（IGU）の榮譽賞を授賞されたときの吉野正敏先生。

先生のこのような精神は、研究者をめざす人は肝に銘じておくべきではないでしょうか。

吉野先生は、国際的な気候学者として長年ご活躍され、ヨーロッパ、スリランカ、中国などでの数々の国際共同研究プロジェクトのリーダーとして多くの研究成果を出されると同時に、日本学術会議会員として、地球圏生物圏国際共同研究計画（IGBP）の国内での強力な推進役も務められました。その国際的な視野の広さから、ドイツのハイデルベルグ大学客員教授、ルーマニア科学アカデミー外国会員などに加え、2001年からは国際連合大学上席学術顧問を務められ、国際地理学連合（IGU）副会長、日中地理学会会長なども歴任されています。日本気象学会藤原賞、インド農業気象学会賞、アレキサンダー・フォン・フンボルト研究賞、国際地理学連合榮譽賞、国際都市気候学会リューク・アワード賞、とうきゅう環境財団貢献学術賞、地球惑星科学連合フェローなど、数々の賞も受賞されています。

気候学者としての吉野先生の研究業績は多岐にわたりますが、ローカルスケールからグローバルスケール

までの気候・気象現象と、それらの生物圏や人間圏への影響なども視野に入れた学際研究に、先生の研究の真髄が表れています。気候学という分野は、地球温暖化などの地球環境問題を背景に、今でこそ気象学会でも人気の分野になっていますが、私が気象学の勉強を始めた頃は、気候学は古色蒼然とした地理学の一分野という見方をする気象学研究者や学生が多かったようです。その中で、吉野先生は、地理学と気象学を悠然とまたいで、地球上のさまざまな気候の解明をめざすユニークな存在でした。

吉野先生が特に深い関心を持たれていたのは、地球上で吹くさまざまなスケールの「風」の気候学的解明と、その地理学的あるいは人間学的考察であり、ご自分のことを、「風や」とも称しておられるほどでした。旅行好きなので世界のあちこちを歩き回ってできる学問がいい、ということで地理学を選ばれた先生らしく、風の特性を、気象測器などなくてもノートと鉛筆とカメラだけで、それぞれの地域に生える樹木の形態・景観から風を「観る」という手法を確立されています。これらのユニークなフィールド調査の結果をまとめた「小気候」と、その研究手法を記載した「小気候調査法」の二つの著書は、吉野先生の最初の代表的な研究業績となっており、中国語にも翻訳されています。これらの研究を集大成した英文著書 *Climate in a Small Area* (Univ. of Tokyo Press, 1975) は、気候学者としての M. Yoshino の名前を世界的に有名にした記念碑的な名著となっており、現在でも世界の多くの研究者により引用されています。

吉野先生の気候学のもうひとつの特色は、フィールド調査・観測で明らかにされた小規模現象と広域気象資料や衛星データ等の解析による広域の現象をつないで、気候現象の統合的な理解をめざすところにあります。さらに、気候学・気象学だけでなく、人文科学や生態学なども含め、様々な分野の研究者を集めて学際的共同研究を、先生の幅広い教養と洞察力でリードし、包括的にまとめていくというスタイルで行われました。例えば、冬に地中海沿岸に吹く季節風の一つであるボラ (Bora) の研究をまとめた *Local Wind*

(Univ. of Tokyo Press, 1976) や、アジアモンスーンの気候と水循環の研究をまとめた *Water Balance of Monsoon Asia* (Univ. of Tokyo Press, 1971) などは、地域スケールから大陸スケールにまたがる風と雨の気候とその影響を、このスタイルで先生が包括的にまとめられたすぐれた著書ともなっています。

吉野先生の学際的研究は、当然のことながら、現在の地球環境問題に関わる研究へとつながっていきました。中国タクラマカン沙漠地域での砂漠化機構解明の研究やモンスーンアジアにおける食糧安全保障に関する研究などは、定年後の70歳前後でも衰えることのない先生の研究への意欲とリーダーシップで進められていました。先生が中心となって開始された気候影響・利用研究会は、IPCC での大きな課題のひとつである「地球温暖化」の適応策に向けた研究に大きく貢献しつつあります。身近に吹く風とその分布や人文科学的意味を考えながら、地球規模に吹く風 (即ち大気大循環) やその変化と人間活動との関連までに興味を広げて来られた「風や」吉野先生の思想は、「風は、地球上の生物にとって、かけがえのない、どうしても必要な現象だということが出来ます」という子供向けの本の締めくくりの言葉に表象されています。

私事になりますが、私 (安成) は、アジアモンスーンという共通の関心の「風の吹きまわし (?)」のせいか、吉野先生からお声をかけていただき、1982年から21年間、筑波大学に奉職しましたが、先生とはご退官までの10年間、気候学気象学分野の教育・研究活動を共にさせていただきました。特に1984年から先生が中国科学院の研究者と共同で始められた中国南部 (雲南省、海南島) の研究プロジェクトにも参加させていただき、人文地理、生物地理、農業気象などの方々との学際的な共同研究の醍醐味を楽しみ、人と自然の関係を考える環境学とは何か、先生から多くのことを学ぶことができました。現在の私自身の生き方も、吉野先生との一期一会があったからこそ、と感じています。吉野先生、ほんとにありがとうございました。

(安成哲三)

† 風はどこからくるのだろう 月刊「たくさんのふしぎ」1990年4月号 (第61号) 41pp 福音館